

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八六)

文出水 康生

# 戦国おもしろ百話

## 物外軒・実休・三好豊前守義賢、三十七年の生死

——三好氏の家格上昇・栄典授与での三好義賢の名と相伴衆任命

### 三好氏研究の大展開

三好長慶と松永久秀の名誉が回復され、「下剋上の悪者・戦国の梟雄」の悪名から脱却され、正当な再評価・再認識がされる。「いつもいつも信長・秀吉家康でもあるまい、近世的世界を拓く織田信長の直前の三好長慶の時代こそ見直さねばならない」の反骨の提唱が、中近世移行期の新しい時期区分の研究によって認証される。安土・桃山文化の母胎が天文文化であることが認識され、信長の革新性・



三好実休像(妙国寺蔵)



見性寺に発祠される三好実休の位牌



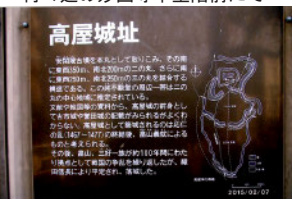
三好氏4代(之長・元長・義賢・長治)墓、見性寺本堂・庫裡



勝瑞城跡まつり武者行列(平成27年5月10日)



再々建の妙国寺本堂階前にて



河内高屋城(羽曳野市)の城跡案内

秀吉の意外性・家康の先見性の三者三様の天下人を出現させる前提に、鉄砲・キリスト教伝来・連歌・茶の湯・白壁石垣の築城の新たな文化の端緒が三好長慶の時代に醸成された。

戦国三好氏の研究を展開させたのは今谷明さんの「堺幕府論」であった。それまでの「常識」を破つての視点が与えられた。その視点と論理の学問的、批判的創造から戦国三好一族の三好氏政権の研究が「第一次史料」の発掘、利用によって大展開している。その先

鋒として牽引するのが今春に天理大学准教授に就任された天野忠幸さんである。『戦国三好政権の研究』(清文堂・二〇一〇刊・二〇一五増補版刊)、『三好長慶』(ミネルヴァ書房・二〇一四刊)、『三好一族と織田信長』(戒光祥出版・二〇一六刊)などを出版して大活躍である。その精励ぶりに大拍手をし、その恩恵を享受して感謝している。「二次史料」重視の学問的研究による旧来の二次史料による研究、常識が痛快に否定、改変されて再評価・再認識が大展開してい

る。ただ、一次史料重視が行き過ぎて、従来の郷土史・地方史の記述してきた「ぬくもり」が失われ、人名が否定されることであつて、研究図書に掲載される「系図」に混乱が生じている。科学的発掘調査、一次史料による科学的歴史研究の大展開を大いに期待すると同時に、その成果が議論されて納得される共有のものとなることを希求する。

### 物外軒・実休・三好豊前守義賢

三好長慶の長弟の三好義賢として、戦国天下人たる兄を三好氏の本拠である阿波国主として支えた義賢の名が一次史料に見られない、存保の義賢の堅の字の下半に花押が重なり、賢の字に誤写されたもの、とされる。それで入道名の実休の名で三好実休として記述されるようになってくる。筆者も山上宗二に「武

士にして数奇者」と最大の評価をされる茶人三好実休として、主君の細川持隆を弑逆・下剋上の三好義賢の名より再評価のために良いか、と軽く考えていた。しかし、一次史料には見られないのに、何故に数知れず手にする「系図」に全て義賢と記載されるのだろうか。三好氏の「通字」として使用されない義の字を義賢として使用するのは、長慶が修理大夫、相伴衆とされ、長慶の嫡子の孫次郎が將軍足利義輝からその偏諱の義を与えられ義長から義興を名乗り、御相伴衆に列せられ、「三好亭御成」が実現され、その後阿波国主の長慶の弟が続いて相伴衆に任じられる時に義輝の偏諱が与えられて三好義賢を名乗る、とすると三好氏への格別の家格上昇と栄典授与の帰結として大団円となる。当時の状況と論理的には考えられるので、一次史料

に見られないではなく、その証拠を期待したい。それで物外軒・実休・三好豊前守義賢の三十七年の生死の全体的再評価・再認識がされる。三好義賢は三好元長の次男、幼名は千満丸、仮名は彦次郎、実名は之相、之虎、そして義賢。実休、物外軒と号した。官途は豊前守。二五・二六もしくは二七から一五六。

### 三好長慶会の活動

学問的な研究成果を習得することをY軸とし市民運動のバイタリティーをX軸として、その第一象限で++で最大限の学習・市民活動をする。三好長慶会は平成十二・九・九九年七月十二日に六人で結成され、現在会員は三九人。その活動の詳細は『三好長慶会五周年記念誌』(二〇〇二・八刊)を参照して欲しいが、名利を越えた異能集団の活動として同志が共々に活動を展開し、戦国三好氏の歴史的な再検討・再認識の市民運動を展開している。その運動の中で画期的であったのは第二回国国民文化祭徳島大会(二〇〇七年)への『戦国三好フェスティバル』での参加である。県民参加の募集に応じ、「優秀賞」(五〇万円)を授与され、その「紋どころ」をもって反骨た

くましく独創的な企画で「戦国三好一族旗揚げパレード、シンポジウム、講演会、戦国三好お宝資料展、戦国三好全国集会」の四本立てで、異能集団としての四六〇余人が同志として名利を越えてのボランティア精神で協力、実行した。通常のマニュアルでの換算なら助成金の数十倍、との豪語を可能とする豪華なものが実現できた。その国民文化祭を機に激論・協調しながら

画期的な『戦国天下人三好長慶、えつ?阿波踊り』のパンフレットを発刊した。そのパンフレット、戦国三好フェスティバルを企画・立案したのは、三好長慶会結成以来に曲折はあつても共生してきた昭和十八年に生まれ、その名の通りに反骨で生きた東條英機時の東條英機首相に倣う(さん)と筆者であった。この小稿のテーマも、ヤフーオークションで落札した『三好長慶書札』(源姓三好之系図)、金象嵌された「海部泰吉」の銘刀などを手にしての議論・探求の結果を研究例会に東條さんが会員に報告したものを筆者の文責で報告する。なお、国民文化祭のシンポジウム講師は天野忠幸さんで、当時は大阪市立大学の仁木宏門下として三好氏研究に精励する未

だ無任所の新進気鋭の研究であった。先見性を持って、先物買いをし、共生・共存・共栄共楽…を、とする。

### 三好氏の河内・大和への進出

戦国三好氏の本拠は阿波で、小笠原氏が三好の地名を名乗つて三好氏を称し、応仁文明の乱から大坂の陣までの

中近世移行期に三好之長・長秀・元長・長慶・義興の五代が活躍し、阿波・讃岐・淡路(A S Aトライアングル)を本拠として京畿・堺に進出して三好長慶が信長の直前に戦国天下人となる。長慶が父祖の畿内での基盤を継承して三好本宗家としての家臣団を形成して將軍を必要としない新たな政治秩序を形成する。その位置関係から環大坂湾政権と称される。その政権の中心が五三三年から六〇年には芥川山城(高槻市)で、六〇年から飯盛山城(大東市)四糸畷市とされる。將軍足利義輝を近江に追放して、將軍を必要としない政権を形成し、將軍を疎外しての長慶による永祿改元に危機感を持った義輝が京都帰還を図り、それが和睦によって実現される。五五八年十月以来に三好長慶の河内・大和への進出が松永

久秀を先鋒として凶られ、畠山高政が守護であった河内を支配下に置き、三好長慶が永祿三(二五六〇)年十月二十四日に飯盛山城、十月二十七日に三好実休(永祿元年)入道が高屋城に入り「阿波国主・河内国主」となる。長慶が嫡子義興に家督、芥川山城を譲つて飯盛山城で政治する。

### 三好氏の家格上昇と栄典授与

長慶は義輝將軍を近江に追放する三五三三年には御供衆に任じられ、位階も將軍足利義輝や旧主細川晴元、細川氏綱と並ぶ従四位下・筑前守であった。それで天下人であつたが、その間に昇進することとはなかつた。將軍義輝との和睦の後の永祿三(二五五九)年から四年にかけて集中的に栄典授与が行われる。二年十二月に嫡子孫次郎に義輝から義の字を直筆で与えられ、義長を名乗る。三年正月に長慶は相伴衆・桐紋拝領、義長は筑前守に任官する。正月二十七日の正親町天皇即位式の警固をし費用百貫負担の父子に天皇から天盃・御剣下賜。二月に義長と松永久秀が御供衆に加えられ、久秀が弾正少弼に任じられた。九月に重臣の三好長逸が従四位下

に。四年の正月に義長義興と改名が従四位下、相伴衆(藤原久秀も従四位下、相伴衆とされる。二月に義興と久秀に桐紋拝領。二十三日に義興が鹿苑寺で將軍と出合い酒を振るまわれる。その返礼を奉行人に勧められ、相伴衆就任・従四位下叙任・桐紋拝領に対する將軍への返礼とされるが、三月三十日に『三好亭御成記』に記録されるような未曾有にしての破格の足利將軍の三好邸へのお成りが実現し豪華な饗応がされた。この饗応には三好実休・安宅冬康十河一存の兄弟は参加していないが、茶人の実休の所持する三日月葉茶壺・実休肩御など座敷飾りとされていた。

この將軍の三好亭御成りの後の閏三月十九日に義輝將軍は高屋城の三好実休を相伴衆に任命する。二十一日に伊勢貞孝・向貞助が使者として出向き、三好長慶・細川藤賢氏綱の弟が同行して祝福したとされる。この時に三好義賢の名が、義輝の義と藤賢の賢とで命名された、として以後の全ての系図に記録されたとする。三好氏の永祿四年三月における威勢とその中に物外軒・実休・三好豊前守義賢を位置付ける。「戦国ロマン」を求めての「小説歴史」。

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八七)

文出水 康生

# 戦国おもしろ百話

## 江戸幕府旗本三好越後守家の伝家の宝刀と系図を手に

——三好三人衆、釣閑斎宗謂三好下野守と為三好因幡守任

### 事実は小説より奇なり

一期一会の出会いの不思議を共楽しながら四五〇年の昔と今を探索して無知の知を楽しむ。今、ここに江戸幕府の旗本として戦国三好一族から存続する三好越後守家の伝家の宝刀とされた海部泰吉の名刀とその系図を手にする。その金象嵌に「本作海部泰吉也於泉州面鑑武者切落依是三好越後守為重代調法者也」「雅」と刻まれている。この刻銘の事実は「系



海部泰吉の金象嵌銘、雅(東條英機蔵)



海部泰吉の刃紋



久米田合戦での三好実休戦歿地碑(岸和田市久米田)



湯川直光の碑(八尾市・教興寺)

図」によると宗三息一人三好下野守同為三兄下野守子これ無きに付家督す為三十三六歳の時根来ヨリ飯盛の城取巻き其の時湯川上野と言一方の大將と相戦ひ痕を蒙ると雖も上野を討取り付ては三好筑前より證文を取り同姓備前守手前に今にこれ在り」である。

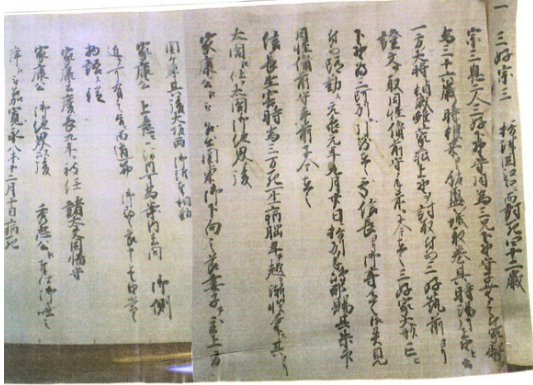
功により三好長慶より証文(感状)を得て、江口の合戦(五四九)以来に敵対していた三好為三(宗三の子)が三好一族に復帰して長慶の死後に三好三人衆とされる三好下野守の家督を為三が継ぐ出発となる。

教興寺合戦は永禄五(二五六二年)五月二〇日に、その三月五日の久米田の合戦で河内・紀伊の畠山高政・根来衆軍に実休三好豊前守義賢軍が敗北し、義賢が根来衆の鉄砲に撃たれて討ち死にし

て三好氏の衰亡の一因となった雪辱戦であった。飯盛山城に籠城した三好長慶を攻囲する畠山・湯川軍を飯盛山城からの長慶の指揮で、家督を譲った芥川山城の三好義興と六角勢に対していた松永弾正小彌久秀軍を結集させた。さらに久米田合戦で敗北して、その退陣が困難であったことから「久米田の退き口」と後々まで伝承され、その敗北を恥じて参陣していた武將がすべて入道して阿波の武將は坊主頭ばかりとなつた因縁の合戦の雪辱のために阿波勢が出陣する。三好康長は笑巖、篠原長房は紫雲、二宮成助は卜閑などのように坊主頭に甲冑を着けて奮戦する。教興寺合戦では長慶と久秀による畠山湯川軍への調略が冴えわたり、畠山勢に疑心暗鬼の相互不信が広がり、高屋城から紀州勢が脱出して高野街道を南下した。その紀伊奥郡の国人衆、根来衆に打ちかかり、双方に戦死戦傷者多数の激戦の中で湯川上野守直光が為三に打ち取られた。「湯川直光公勇戦の地」の碑が教興寺境内に建立され、「三好実休戦歿地」の碑が久米田に大正十年に建立されている。

### 釣閑斎宗謂三好下野守政康

この人物が三好長慶の死後に三好日向守長逸と石成主税介友通と共に三好三人衆として永禄八年五月十九日の將軍足利義輝の弑逆、松永久秀勢との三好勢分裂による抗争、織田信長の上洛後の本圀寺逆襲、野田・福島合戦などを主導する。ただ政康の名は「次史料には見



三好越後守家系図前書(部分)

られず系図上での政生や宗謂の弟とされる政勝は禁制の花押が同一であることから宗謂・政生・政勝は同一人物とされ、宗謂の実名は政勝↓政生↓宗謂と変わり、宗謂の弟の為三の実名を政勝として点も誤りと三好宗謂の確定考証を天野忠幸さんがしている。手にする系図にも「三好下野守、法名釣閑於阿州病死。三好為三任、兄下野守家督養子後因幡守病死。三好越後守可正、後号因幡守病死」と書かれ下野守の実名が記録されていない。釣閑斎・宗謂三好下野守(政康)は文武に秀れ、刀剣目利きとして三好一族の多数の名刀所持に功績が知られ、国宝とさ

れる大般若長光を手にし般若若経六百巻にならつて六〇〇貫(約六〇〇〇万円)とされたと言う。その目利き・鑑定力によつて弟の為三の湯川直光討ち取りの太刀を「三好為三大手柄の太刀」として馴染みの本阿弥家刀剣研磨師の家に注文して太刀を刀に磨り上げて、その由来を示す金象嵌銘を入れさせ為三の子の三好越後守家の伝家の宝刀とした。

なお、この金象嵌銘と軌を一にする天下人のステータスシンボルとされる名物が、下野守為三の父の宗三三好越前寺政長が所持していた「宗三左文字」である。三好政長が細川晴元を支持して長慶に敵対しての江口の合戦の時に佩刀としていて、その合戦で戦死の後に武田信玄に追放されていた武田信虎が手中にし、娘が嫁入りしていた今川義元に「簪引出物」として贈り、義元はそれを愛刀として桶狭間合戦の時に佩刀していた。信

長がその刀に「永禄三年五月十九日、義元討捕刻彼所持刀、織田信長」と金象嵌して「義元左文字」と称して所持した。それが本能

寺の時に焼身となつたが秀吉が焼直させて所持して秀頼に継承され、秀頼から徳川家康に贈り、家康は大坂の陣の時に佩刀していた。それ以後に「徳川御物」として明治まで秘蔵した。織田信長の顕彰のために建勲神社が京の船岡山に建立された時に奉納された。現在は国立京都博物館に寄託されている。

### 海部泰吉の銘刀

海部氏吉泰吉の父が鍛えた「岩切り海部」の名の名刀が福岡県重文として現存し、三好長慶が佩刀として歴戦を戦い戦国天下人となった。氏吉を父とする泰吉が鍛えた名刀が「鎧切り海部雅」とされる。その名刀を日本美術刀剣保存協会徳島支部長東條英機さんが入手された。びつくりの新発見であり、四〇

〇余年を経ての今に系図と銘刀の組合せで何物にも優る自己主張をし、その威光に圧倒される。「海部泰吉作(金象嵌銘)、室町時代後期(大永頃)。鑄造、庵棟、身幅尋常、重ね薄く、磨上て反り浅く、中鋒やや延びる。鍛は小板目肌つみ、流れ肌交じり、地沸微塵につき、

鉄冴える。刀紋は、のたれに互の目交じり、足、匂深く、匂口明るい。帽子は乱れ込んで小丸、深く返る。茎は大磨上、先切、鑢目切、目釘孔、ハバキは金鍍金重。沸匂深く、匂口明るく冴え、頗る出来が優れ、号の通り「雅」な一振りである。金象嵌銘が非常に興味深く、海部派の祖氏吉の子泰吉の作で三好越後守重代重宝」とされる。

### 為三三好因幡守二任

この人物が江戸時代からの講談を承けての『立川文庫』の「真田十勇士」の三好為三入道、兄の釣閑斎・宗謂三好下野守が三好清海入道のモデルとされた。今年の大河ドラマ「真田丸」に関連するものとして興味深い。

為三三好因幡守一任を父とする三好越後守可正を祖とする歴代の事跡が江戸幕府に弘化三二八四六年に可正から九代目の三好大膳長済によつて報告されている。三好大膳は報告当時には十人頭であった。

この「先祖書」の前書きにこれまで書いたような記録がされている。釣閑斎宗謂三好下野守政康が三好三人衆とし

て活躍し、その身につけた刀剣目利きの鑑定力と熱意が知られ、大鼓の名手としても演能の時に指名され、本園寺攻めの時に退路を塞がれた危機をその技能の縁で救われ、茶事にも長じていたと言われる。野田福島合戦後に兄弟が阿波に隠退していた時に兄が病死したものとされ、為三が織田信長に尋ね出され、信長から摂津豊島郡で朱印による死行があり、本能寺の変の時には万死に一生を得て逃れ、病癒の後に快気して豊臣秀吉に仕え、秀吉の死後に徳川家康に召出され、関ヶ原合戦、冬夏の大坂の役の時に家康の側近として河内の道案内をし、慶長九二六〇四年に諸大夫因幡守に任ぜられ、家康の死後には秀忠に御咄衆として仕え、寛永八二六三二年十二月十日病死したとされる。享年は二五六二年に系図の「為三十六歳の時……」の記載を十六歳と読むと八十五歳、三十六歳と読むと二〇〇〇〜三〇〇〇石の旗本として存続する。

こんな「事実」は小説よりも奇なり」の生涯を戦国三好一族の興亡の中で生きて死んだ。